

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名	金子 秋斗
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第114号
学位授与の日付	2021(令和3年)年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条
学 位 論 文 題 目	鎌倉期九条家の家意識の形成と展開 —九条兼実・道家・慈円の研究—
論 文 審 査 委 員	主査 今堀 太逸（佛教大学教授） 副査 貝 英幸（佛教大学教授） 副査 佐古 愛己（佛教大学准教授）

### [1]論文の概要

摂関政治は天皇の外戚が摂政・関白として天皇を後見していくことで成り立っていた。それが院政期以降、摂関は天皇との外戚関係を必要とせず、摂関の職を父子継承できるようになる。この摂関職を父子継承する「家」が中世摂関家である。九条家は院政期の摂関藤原忠通の三男九条兼実を祖とする摂関家の一流である。兼実の孫道家の子教実が継承し、弟の良実が二条家、実経が一条家を興し、摂政・関白を輩出する家格を形成、近衛家・鷹司家を含む五摂家として近代まで続いた。

本論は九条家の成立期、兼実の日記『玉葉』、兼実の弟慈円の『愚管抄』、道家の願文、に一貫して見出すことのできる自家に対する家意識の形成と展開、その背景について解明することを目的とした研究である。以下のような五章により構成、九条家の家意識を道家の視点から検討、兼実・慈円の重要性を位置づける構成となっている。

### 序章

#### 第一章 九条兼実の院近臣観—批判とその変容—

##### 第一節 九条兼実の理想

##### 第二節 院近臣に対する認識とその変容

##### 第三節 『愚管抄』への影響

#### 第二章 慈円の意図—「武者ノ世」における正統性の創出—

##### 第一節 『愚管抄』に見られる九条兼実像

##### 第二節 外戚への関心

##### 第三節 「武者ノ世」と人材

##### 第四節 「慈円書状」との比較

#### 第三章 九条道家の願文にみる家の意識—君臣合体と一流繁昌—

第一節	承久・寛喜期の願文にみる道家の思想
第二節	天福期の願文にみる君臣合体
第三節	嘉禎期の願文
第四章	九条道家の願文にみる家意識の変容
第一節	九条道家の立場の変化と一条実経・九条忠家への相続
第二節	危機における摂家将軍観と慈円の思想
第三節	家祖としての九条兼実とその功績
第五章	九条道家の願文の特質－慈円の願文の影響と近衛家の願文との比較－
第一節	慈円の願文の影響
第二節	近衛家の願文との比較
終章	

序章－本論の視角と構成－では、九条家・人物研究、中世文学研究における九条家への関心、家意識という分析視角についての先行研究を整理している。そして、個人の個性にとどまらない、九条家という家における意識形成・思想形成の一端を明らかにすること、また兼実－慈円－道家の思想的連続性の解明を課題として設定している。

第一章「九条兼実の院近臣観－批判とその変容－」では、家意識の前提となる現実の政治の場、特に治承・寿永内乱期における九条兼実の思想・政治理念を考察している。ことに兼実は後白河院政のもとで、天下の安定化を最優先とすべき立場をとっていて、乱世の原因を院の近臣の言動に求め、徳治の観点より「小人」として批判することに徹底している。兼実は摂関就任後は、院の近臣等の解官を実践するが源通親・丹後局等の後白河近臣勢力の反撃にあい失脚した。兼実が理想とした院の近臣排除は弟慈円により継承され、具体化・体系化されたことは、『愚管抄』巻七の世を直す問答等からも読み取れることを指摘する。

第二章「慈円の意図－「武者ノ世」における正統性の創出－」は、慈円が『愚管抄』において、院政期の外戚勢力に対して批判的に記載していることを分析した研究である。すなわち、兄兼実が得ることができなかった外戚の立場を当該期には不要と位置づけていることの考察である。

慈円は、九条家から摂家将軍が誕生したことから、「武者ノ世」の現代においては、九条家の「武」的側面による天皇を輔佐することこそ時代に適したものと説明していることを明らかにする。慈円の主張する「武者ノ世」とは、武士が台頭したことを意味するのではなく、九条家から摂家将軍が誕生したことを説明するために創出された時代像であるとの結論を導き出している。

第三章「九条道家の願文にみる家の意識－君臣合体と一流繁昌－」では、兼実の孫である道家が、承久の乱において朝廷方が敗北したことに伴う逼塞の後、四条天皇の外祖父・摂政として権勢を誇った時期の願文において祈願された「君臣合体」と「一流繁昌」との関係に着目して、道家の家意識を読み取っている。

「君臣合体」は、一般的には君主と臣下との良好・理想的な関係を表現する用語であるが、道家願文では、九条家所生の幼主を九条家の摂関(外戚)が補佐する体制を意図するものであることを指摘している。また、九条家の「一流繁昌」は、その君臣合体を前提とす

るものであることを明らかにしている。

続く、第四章「九条道家の願文にみる家意識の変容」においては、四条天皇の崩御、名越光時の乱や宮騒動への道家の関与等、鎌倉幕府からの様々な疑惑等により、道家、九条家を取り巻く政治・社会状況が悪化する時期の道家願文を読み解き、考察している。

危機における道家の願文と、盛時の願文とを比較することにより、家意識の変容とその要因・背景を明らかにしている。また、九条家における道家願文の意義についても検討しているが、兼実の王法仏法興隆の功績を九条家の祖業として強調していることをして、九条家存立の必要不可欠の要素であったことを指摘している。

第五章「九条道家の願文の特質－慈円の願文の影響と近衛家の願文との比較－」では、道家の願文と『愚管抄』擱筆以後の慈円の願文との共通点、摂関家嫡流である近衛家の人びとの願文類との比較により、同時代の道家願文の特質を明らかにしている。すなわち、道家の願文は、『愚管抄』の思想のみならず、慈円の願文の影響を強く受けたものであること。ことに慈円の願文における「中興」は、「仏神宗廟」に護持されている九条家が天下を直すとを意味しており、そのことは九条家の摂関が外戚として天皇を補佐する体制をもって成し遂げられるものであると認識されていたこと。第三章で指摘した盛時の道家願文の「君臣合体」は、まさに道家が目指した政道であり、九条家「中興」のあるべき形であると論じている。

## [2] 審査結果の要旨

中世前期における政治史上・思想史上において重要人物である九条兼実・道家・慈円を対象に、彼らの著述に着目し、共通する思想・意識を追求する視点は重要である。これまでの研究では、個人の思想的特徴に解明の視点がおかれていたのに対して、九条家の「家意識」としての共通性を指摘した点を評価したい。

九条道家の願文については、すでに先行研究においても分析されているが、単なる祈願文ではなく、家の歴史そのもの、九条家の歴史の正当化のための言説であるとしての研究は、思想史研究の新たに手法としても注目したい。特に第五章の近衛家の願文との比較は興味深く、九条家の特徴を解明する上での重要な分析方法といえる。

今後の課題について、終章において本人自身が指摘しているが、今後さらに追求・克服すべき課題もある。

自説を展開する上で核となる論拠として、先行研究を無批判に引用、依拠している部分が見受けられる。立論上重要な内容、かつ通説的理解と異なる指摘をする時には、(平氏政権下の兼実の政治的位置などの指摘等に関してなど)、安易に先行研究に依拠するのではなく、著者自身が論証するなど、丁寧な論の展開が必要である。

また、本論文において、「願文」「書状」、『愚管抄』等の著述を分析対象に置くこと自体は評価できるのであるが、記述内容に特化しすぎた感がある。例えば「願文」が記された背景、時期、祈願の対象など、史料自体の分析が十分に行われていないのではないか。内容分析、理解を深めるためにも、史料とその周辺事項の検討は重要である。

九条家の「家意識」、九条道家の思想を分析することに終始しているのであるが、道家の日記『玉蘂』やほかの同時代の古記録等に見える道家の思想の分析も交えて、比較検討すべきであり、願文、書状、『愚管抄』という史料の性格から考えると、史料批判が必要

である。

九条家の家意識という観点の分析は評価できるが、そのことが検討対象や、九条兼実・道家・慈円に関する思想を矮小化した側面のあることは否定できないのではないか。例えば、『愚管抄』の歴史観に関しては「百王思想」や「漢家」の道理と「日本の道理」の対比などの特有の思考がみられること。こうした歴史観が道家をはじめとする九条家の人びとに影響を与えているのか、継承されているのか、という観点がまったく見られないのである。

以上の通り、本論文には課題や問題点も少なからず指摘できる。しかし、本論文において、自家に対する認識を、家意識の形成と展開という形でとらえることにより、自らが属する家(摂関家としての九条家)とそれを取り巻く政治的・社会的現実から生じることとなる様々な認識や思想を考察、指摘している。従来の単調な政治史、思想史研究では決してできなかった分析であり、特色の指摘である。よって審査員は一致して、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと認める次第である。